

## 第1回 最優秀賞

「不便な幸せ」

福岡県 東筑紫学園高等学校 2年

藤本 沙緒里さん

最近、障害を持った人達が、さまざまな場面で活躍し、個性的に生きていることを、よく耳にする。といっても、私は、本当の意味で「耳にする」ことはできない。私自身、重度の聴覚障害があるからだ。

私の学校では、毎年校内弁論大会が行われる。今年、私はその大会に出場した。しかし私は、人の声はおろか、自分の声も聞くことはできない。だから、発音も人とは違っている。そんな私が、壇上で千人もの聴衆を前にして、堂々と語るようにまでなれた陰には、多くの人々の支えがあった。

私は、高校に入学してから『五体不満足』という本に出会った。重い障害を抱えながら、明るく積極的な乙武さん。私は、そんな乙武さんを育てたお母さんの生き方に感動した。それは、私にも、誰よりも厳しく強い母がいるから。障害があると知っていたとしても、母は私を産むことをためらわなかったと思う。母が産んでくれたからこそ、私はみんなと会えた。いろいろなことに挑戦できた。

その一つが、英検を受けることだった。三級からはヒアリングがあるが、私は、困難ではあっても不可能だとは思わなかった。難聴の身で準二級に合格した大學生の存在に、勇気づけられたからだ。受検を申し出た私のために、担当の先生は、英検の本部にかけあい「口の形を読むことでヒアリングテストに代える」という特例を認めてもらった。そして私は、晴れて三級に合格できたのだ。

障害がなくても、やる気のない暗い人

生を送っている人はたくさんいる。私は、障害があっても不幸ではないということ、とを、みんなにわかかってほしいと思いつた。大会への出場を決意したのだ。出来上がった原稿をクラスのみんなの前で読んでみたが、聞き辛い所がたくさんあると指摘された。母と何度も何度も練習して、発音の方はだんだん良くなってきた。しかし、本番前日、マイクを使つてのリハーサルで、私の声はうわずってキーが高すぎるのがわかった。マイクを通すと、何を言っているのかわからなくなってしまふ。その場に居合わせた先生や生徒が首をかしげ眉をひそめているのを見て、悔し涙があふれてきた。その時、放送室で音響の調節をしていた先生が出てこられ、私のために、特別にマイクを調整してくださいました。そして、私がマイクに向かって発音するたびに、みんなが手で大きくマルやバツを作つて声の調子を知らせてくれた。

いよいよ当日。弁論には制限時間があるので、途中、時間の経過を知らせるベルが鳴るのだが、私には聞こえない。聴衆席の友人たちが、そのベルを聞いて、手を上げて合図してくれた。最後に「障害は不便です。でも、決して不幸ではありません」としめくくった時、拍手の音は聞こえなくても、その響きは体に伝わってきた。友達の間が「良かったよ！」と動くのが見えた。

子供の頃、「なんで私だけ耳が聞こえないの。聞こえるようになりたい」とダダをこねたことを思い出す。自分の障害を受け入れられず、苦しんでいたことを。今私は、ありのままの自分を受け入れることができる。英検を受けるにも、弁論大会に出場するにも、多くの人の助けが必要だった。しかし、それは恥ずかしいことでも、かわいそうなことでもない。

誰にだって、できることとできないことがあるんだから。私は、私にしかできないことで、人を助けることもできるんだから。

私は将来、自分と同じ障害を持った子供達に関わる仕事をしたい。悩み苦しんでいる時も、物の考え方や受け取り方を変えることによって、全く違った人生を送ることもできる。誰でも、きつと幸せになれる。そのことを、自分の経験を通して、子供達に伝えていきたい。それが、今日まで私を支えてくれた多くの人々への、私の感謝の気持ちなのだ。

## 第1回 優秀賞

### 「大志を語る」

大分県 藤蔭高等学校 3年

宮川 哲朗さん

「何故私は英語を学ぶのか。」こうした疑問に私は次の言葉を思い浮かべることとしています。「その国の言葉を学べば、その国の人を憎むことはできなくなる。」このように外国語の理解は建設的なことに結びついていくのは勿論ですが、私にとっては、将来の自分を造りあげる大切な人と近づく最も基本的な方法だと気付かされるようなことがあります。言葉を通して、グローバルな考え方を学び、国際相互理解を深め、将来の自分を形成していく一本の道が見えたのです。

私は、福岡県原鶴温泉という所に住んでいます。父がホテルを経営している関係で外国人と接する機会が多くあります。中学生の時、ローリングストーンズのロン・ウッドさんが宿泊された時のことです。当時、私は友人とバンドを組み、彼らに憧れていたので、横に座つ

ているだけで夢のようでした。やがて、父が原鶴温泉名物の鵜飼いの鮎が年々減少していることを話したことをきっかけに、彼は話題を音楽から、自分が取り組んでいるボランティア活動に移し、熱心に語り始めました。有名な一流アーティストで、しかもかなりお酒に酔っていたのに、野生動物の保護や環境汚染の問題など地球環境について真剣に語る彼の姿に私は驚き、何か強く伝わるものを感じました。残念なことに、私は父の日本語訳を笑顔と身ぶりの中で聞くのみで、直接会話のできないことのコミュニケーションの限界をつくづく思い知らされました。

しかし同時に、私は何故、彼のような世界的に活躍しているミュージシャンが環境問題を話題にするのか不思議に思いました。今にして考えると、それは、音楽家や芸術家の立場であっても、現代の我々の求めるものは「共生」ということではないかと思うのです。経済的発展を目指してきた二十世紀は終わりを告げ、二十一世紀は人と人、人と自然が共に生きる条件を地球的規模で探る時代です。そうしたときに、環境問題を抜きに私たちは生きていくことはできません。さらに、日本の環境問題をグローバルな視野に立って外から見る必要を感じるのです。

昨年タイへ旅行した時に、私は、飲料水のペットボトルが観光地の道端に数多く放り出されたままの状態を目にしました。それを燃やして発生するダイオキシンによる環境汚染の被害をタイの人々は認識していないと外国人の私は鋭く批判できたのです。

しかし、日本も他の国々から見ると、悲惨な有様です。二酸化炭素の排出量は増える一方で、ゴミの減量も困難な状況

です。他にも、フロンガス、廃棄物、環境ホルモンといった多くの環境問題を、日本は背負っています。

一方私は、徹底した生産段階からのゴミ回避政策や環境保全対策を、国家一丸となつて行っているドイツのことを知りました。日本が行っているゴミの「減量」とか「環境にやさしい製品」という中途半端なものではないのです。製造会社、流通業者、消費者が、それぞれの立場で廃棄物を出すことを徹底的に「回避」しています。ドイツ人の環境問題への意識がこのように高いのは、ドイツの学校では、小さい頃から環境教育を厳しく行っているからです。しかし、日本では教育、生産、すべての面において対策がドイツよりも二十年遅れており、環境問題への意識の甘さが拭えません。地球上の生物が共に生きていくために、本当に必要なことを私たちは学ぶべきであり、そのようなことを教える教育システムを、日本は外国から学び、早急に実践していかなければいけません。

私は、環境問題をグローバルなものとして捉える知識を高めるために国際的な大学へ進学し、専門知識を得たいと思っています。日本人として、国際人として地球環境を考え、行動できるボランティアの一人になろうと志をたてています。私にとつて、「外国語を学べば、地球、日本、そして私自身を変えることができる」と言えます。

## 第1回 優秀賞

### 『「法を」…人々、子供たちのために』

山口県立山口高等学校 3年

田中 梓さん

新聞やテレビで「幼児虐待」の四文字

が踊っている。かわいい我が子をどうしていじめめるのか私にはわからない。昔から子供は宝物と言われてきたのに、何故大切にされていないのだろう。子供こそ、二十一世紀を担う国の宝ではないだろうか。少子化も深刻となっている今日、子供の権利を認め、子供を尊重する社会を私達は築いていくべきだと思う。特に、現代の子供達を取り巻く環境には問題点が多い。学歴偏重からくる受験戦争、更に就職難などがあり、私達は様々な不安や恐れを心の底に抱きながら日常生活を送っている。

このような現在の社会問題の解決の一方法として、多様化する社会に対応しうるような「法律」の整備、改善が不可欠ではないか。同時に、大衆による法の意義の更なる理解が必要ではないか。私は人々が安心して暮らせる社会を皆で築きたい。また子供達が健やかに成長できる世の中にしたい。私は良心に従って行動し、困っている人々を法律によって救いたい。

今、私の身近で起きたことで、高い関心を抱いていることが二つある。

一つは父が相談を受けた国際養子縁組についてである。それは、長い間タイで暮らしてきた女性が老後を日本で暮らすと養女を連れて帰国する際に起きた。本人は日本人なので帰国できたが子供はできなかつた。親が子を連れて故郷へ戻るのは当然の事である。しかし、東南アジアなど発展途上国では人身売買等の問題があるためか、日本でこの件は法的には認められなかつたらしい。父の知人のように純粋な気持ちで子供を連れて帰り、教育を受けさせたいと願う人は珍しいようだ。母が裁判所の調停員に尋ねたが、凡例がないということだった。父は国際養子縁組の支援団体に調査

を依頼し書類を送ったが、未だに許可がおりていない。心待ちにしている母子にとつて残念な事だ。もう二年も経つのに問題は解決せず、今現在に至っている。

もう一つは妹のクラスの不登校の中学生についてである。その母親は、十七歳で子供を産み、子育てに苦戦し、現在娘が不登校になっていると聞いた。親子の信頼関係も築けず家庭は荒れ、些細な事で行き違い、物を投げ合ったり、時にはパトカーを呼ぶことさえあるという深刻な状況だ。豊かな日本で何の不満がという気もするが、妹は心配して毎晩のように彼女に電話をかけ励ましている。この二つの顕著な例を通して、恵まれている自分に改めて気付き、感謝すると共に、世界の各地で苦しむ多くの子供達のことには思いをはせた。

大人から平気で捨てられ、ストリート・チルドレンになった子供達。貧しさ故に売買される子供達。その反面、豊かな国に育ちながら無気力で、非常識な行動に走る子供達。「子どもの権利」どころか、生存さえ危ぶまれている子供達もいるのだ。ようやく日本でも、一九九四年に「子どもの権利条約」が批准された。しかし、その「子どもの権利」がこの豊かな日本でさえ忠実に護られているか疑問である。

二十一世紀は「子どもの権利」を第一に考えて、真に輝かしい時代になることを期待している。そこで、私自身に出来ることはと考えた時、法律を学びたいと思った。もし私が法律の専門知識を持っていたら、先の身近に起こった二つの問題も、適切なアドバイスを与えたり、問題解決の糸口を見つけられたかもしれない。少なくとも、何らかの形で貢献出来るに違いない。

「法律家」が必ずしも万能だとは思っ

ていない。しかし、今の複雑な世の中で、「法律」が手助けになることは確かだ。私はまだ幼く、未熟な高校生にすぎない。だから、多くの経験を積んで、広い視野に立って行動できるようにになりたい。来るこの二十一世紀を法律家として生き、現実と真正面から向き合った時、私の未来は切り開けるだろう。

## 第1回 審査委員特別賞

### 「甲子園への夢」

沖縄県 沖縄尚学高等学校 3年

比嘉 公也さん

全国四千数校の高校球児たちが夢みる甲子園への道。その夢の頂点に立つことを体験した私は、改めて「夢を見ること」に大きな意味があることを知った。

第七十一回選抜高校野球大会の開会式。澄みきった空の下、鮮やかな緑の芝生に感動しながら入場行進を終えた。一回戦での甲子園初のマウンドは不思議なくらい緊張はしていなかった。第一球目がストライクになり、もっと楽になれた。勝ち進んでいくうちに、夢のなかのチームでしかなかったPL学園との対戦が現実となった。相手は優勝候補。負けても仕方がないという思いもあったが、私はどうしても勝ちたいという気持ちの方が強かった。だから、打たれたら負ける場面でも積極的に勝負した。その結果、延長十二回、二百十二球という初体験の球数を投げぬき、準決勝での勝利をものにした。いよいよ決勝戦。多くの応援団がスタンドを埋めつくす中、将来のことを考えると連投はさせられないという監督の判断に従い、私は立っていったはずのマウンドを見つめながら試合

を見守った。そしてあの優勝の瞬間、グラウンドに飛び出し健闘した仲間と抱きあった。何度も歌った校歌を夢のような気持ちで歌ったこと。スタンドの歓声がいつまでも鳴りやまなかったこと。大ウエーブが球場を何周もする中で、沖縄県勢初の優勝旗を手にしたことなど、忘れることのできない感動を体験した。

私は幼いころからスポーツが大好きだ。中でも野球とのつきあいは長く、少年野球をしていた兄の影響で自然にのみこまれていった。それが私と野球との出会いである。そのころの野球は、ボールを打って投げるだけの、純粹に楽しむ野球であった。高校に入学し本格的に野球を始めた私は、初めて大きな壁にぶつかった。頭ではわかっているも体がいうことをきいてくれない。中学生の時描いた夢とのギャップが大きくて、楽しかったはずの野球を「やめたい」と何度も思った。しかし、私には意地があった。私は投手として、マウンド上では常に細心の注意をはらって投じている。不意に投げた一球で勝負が決まる時があるからだ。それでも、「もつと集中しろ」と怒られる時がある。細心の注意をはらうだけでは足りないのだ。だから私は、練習でも試合と違って一球一球に気持ちをこめて投げた。そしてひたすら走った。そうやって苦しい事を乗り越え、大きな力と充実感を得ることができた。その結果、春の選抜大会ではいくつものピンチを切り抜け、「優勝」という夢の頂点をきわめたのである。

優勝後は人と人とのつながりの大切さや感謝の心などを知り、まわりの人たちの喜びと期待の声を背に次の夢に向かった。いよいよ三年生にとって最後の夏の大会。ベンチ入りするために頑張ってきたのにできない人もいる。実力主

義の世界に年齢は関係ない。メンバー発表の日、名前を呼ばれなかった三年生の気持ちは痛いほどわかった。しかし、みんなは自分を捨てて裏方にまわった。「心は一つ」は沖縄尚学高校野球部の夏の大会に向けての合言葉だ。メンバーとメンバー外が共に「甲子園へ」という一つの目標に向かうことの決意でもある。全員が心を新たに頑張った。その結果、勝って当たり前と思われているプレッシャーをはねのけ、沖縄大会を制覇することができた。監督を胴上げしたあと、今まで頑張ってくれたメンバー外の三年生を胴上げした。春の優勝とは違う涙がこみ上げてきた。

私の帽子の裏には「夢」と書いてある。そこにたどり着くには日々努力が必要だが、それだけではなかった。苦しくてやめたくなる日も少なくなかった私を、明るく支えてくれるすばらしい仲間がいた。私は今回、その仲間と一緒に夢にたどり着いた。将来教職を希望する私のこれからの夢は、高校野球の指導者になり恩師と対戦することだ。そして、今度は監督として甲子園に出場することである。私にとって「夢」とは、人生に常に目標を持たせ、私を成長させてくれるもの。私の甲子園への夢は続く。